

## 地域づくりとメディアの役割をめぐって

### - 社会教育活動としてのラジオ放送番組「Bungamati Aawaj」の事例 -

Community Development and the Role of the Media

: A Case Study of the Radio Program "Bungamati Aawaj" as Social Education Activity

ながおか ちずこ  
長岡 智寿子

#### <要旨>

社会教育学はその研究対象とする「地域づくり」や人々の生活の在り様を示す「地域性」等にどのように向き合うべきであるのか。また、社会教育はどのように応えることができるのだろうか。本稿ではネパール、カトマンドゥ近郊のブンガマティ村における住民らの大災害からの復興をめぐるプロセスや権利保障をめぐる問題について、地域づくりとローカルメディアの役割とともに社会教育的見地から考察することを試みる。

#### <キーワード>

地域づくり,社会教育,成人期の学び,コミュニティラジオ

## I. はじめに

### 1. 問題の所在

#### (1) 「地域づくり」をめぐる社会教育的課題

今日、地域の再編、創生に向けた政策が重要課題として位置づけられ、各地で多様な領域から様々な取り組みが実践されている。例えば、日本政府は 2015 年に国連サミットにおいて策定された SDGs（持続可能な開発目標: Sustainable Development Goals）の理念を受け、「誰一人取り残さない（No Left Behind）」社会を実現するために『SDGs アクションプラン 2020』（外

務省)を掲げている。アクションプランの中では、「日本のSDGsモデル」の一つとして、地方創生、強靱かつ環境に優しい魅力的な「まちづくり」に積極的に取り組むことが提起されている<sup>1)</sup>。SDGsは地球規模ともいえる人類共通の課題を具体的に分かりやすく17の目標と169のターゲットに分けて示すとともに、その問題解決に向けて取り組むことを示唆するものである。今や、行政機関のみならず、企業の他、学校教育の場でも教育活動に積極的に採り入れられている。しかし、現実には、国や地域の政策として展開される「地域づくり」や「まちづくり」など、その地域の実情を考慮するものでなければならない。つまり、どのように展開していくことができるのか、それぞれの地域の現状に基づき、その地域特有の固有性を把握しつつ、捉え直す作業が必要となる<sup>2)</sup>。

このことは地域社会をフィールドとする研究活動においても同様である。例えば、日本社会教育学会編『地域づくりと社会教育的価値の創造』(2019)では、今日の地域づくり政策下における社会教育研究の課題、研究の方向性を確認するとともに、次のように課題を捉え、問題提起を行っている。第一に、「地域づくり」は地域改良運動のように社会教育政策と結びついて支配の再編の手段として機能してきた側面がある一方、市民の主体的参加を促す面を含む両義的側面がある。そのため、まずは、政策そのものの批判的検討を踏まえ、どのような地域社会を展望することができるのか、議論を重ねていくことが不可欠であること。第二に、「地域づくり」の様々な実践における教育的意義について、地域住民の参画のプロセスを発展させていく必要があること。第三には、社会的弱者(例：高齢者、障がい者、生活困窮者、女性、外国人移民など)との共生を目指す地域づくりの在り方を検討していくことが今日的課題として重要である、としている(日本社会教育学会編, 2019, p.2-3)。

これらの指摘は、社会教育学がその研究対象とする「地域づくり」や人々の生活の在り様を示す「地域性」等にどのように向き合うべきであるのか、また、社会教育はどのように応えることができるのかを問い直そうとするものである。このような問題意識を踏まえ、本稿では筆者の調査地である南アジアのネパール、カトマンドゥ近郊のブンガマティ村において、住民らの生活圏の中で生じている権利獲得をめぐる問題に焦点を当て、その交渉のプロセスを社会教育的見地から考察することを試みる。

## (2) 地域づくりを担うメディアの役割に着目して：コミュニティラジオ放送の価値

本稿におけるもうひとつの問題意識として、地域づくりを育むメディアの役割である。知識基盤社会といわれる今日、私たちの暮らしを支える様々な知識の体系の中で、情報へのアクセスは欠かすことができない。情報化社会とは、一般には、高度に発達した技術の下で、物質に代わり情報が資本として優位となる社会を意味し、脱工業化社会と同義に扱われる。もっとも、一口に「情報」といっても社会生活の中では多様な形態の情報が存在している。本稿で事例とするネパールにおいては都市部においてもインターネット環境は未整備であるため、「情報」とは口承、または音声により伝授される形態の情報が優勢であるといえよう。しかし、そのよ

うな社会情勢においても、情報へのアクセスはもはや人々の生活課題であり、ラジオやインターネットの利用を促す教育開発政策の展開がめざましい。特に、農村に暮らす女性が生活に必要な情報を摂取し、また、その利用を試みることを学ぶ機会が求められている。そのような学習活動は成人教育、社会教育活動として位置づけられ、「地域づくり」においてはノンフォーマルな学習活動（社会教育、成人教育）のみならず、インフォーマルな教育活動も地域を支える教育的価値を備えている<sup>3)</sup>。本稿では、地域社会に根差す特有の事情やその地で暮らす人々の生き方を支えている社会、文化的背景を踏まえ、「地域づくり」とメディアを活用した成人の教育活動を検討するものである。

## II. 大災害後の社会における復興の過程から

### 1. ゴルカ大震災がもたらしたもの

2015年4月25日、M7.9の大地震が発生した。ネパールの首都・カトマンドゥの北西部ゴルカ(Gorkha)を震源とするものであり、カトマンドゥ盆地に暮らす人々は甚大な被害を受けた。本稿で紹介するラリトプル郡ブンガマティ村はカトマンドゥ市街地から南西約10キロに位置し、ネワール族の伝統的な集落である。ラト・マツェンドラナート寺院がある村としても有名である。筆者は以前からブンガマティ村の女性たちを対象に識字教室を中心とする教育支援活動に関わっていたことから、継続してこの地で調査を重ねてきた<sup>4)</sup>。2015年4月初旬にブンガマティ村を訪問し、帰国後に発生した大地震の報道には驚きのあまり言葉を失ってしまった。その後も復興支援の在り方やそのプロセスについて訪問調査を継続し、検討を重ねている。ブンガマティ村の約8割の家屋が地震によって倒壊、損傷を受け、政府からのわずかな支援金が支給されたが、大地震から5年が経過した現在においても住民は仮設住居での生活を余儀なくされている<sup>5)</sup>。なぜ、復興の目途が立たないのであろうか。慢性的な社会の貧困や脆弱な政府の体制にも要因があるとされているが、これまでの調査の結果、次のようなことが明らかになってきた。

第一に、震災後、村落周辺の大気汚染による村人たちへの健康被害が深刻化していることである。カトマンドゥ盆地では復興事業のために建設資材としてのレンガが大量に必要となっている。そのため、大震災後、村落周辺に建設された複数のレンガ工場の排気により、村の空気は汚染され、呼吸器系を患う村人が急増しているのである。第二に、国の開発政策として実施されている幹線道路建設事業により、コインチャ地区の住民らが先祖代々に渡り維持してきた土地が政府に奪われていることである。大地震の後、村人らは土地を所有していないことから補償を受けておらず、家屋を再建することもできない状況に置かれている。そのような状態の最中、ネパール政府はタライ地方につながる幹線道路の建設事業を進めるため、ブンガマティ村の住民の土地を占有することとなったのである。復興支援どころか、人々の生活圏が政府の開発事業によ

り浸食され、社会的弱者がさらに周辺化されているといえる。村人たちの生活状況は、長期に及ぶ仮設住居での暮らしから精神的負担が募り、心理的、身体的リスクが増している。



写真1 村落内の仮設住居  
(筆者撮影 2019年8月)



写真2 ブンガマティ村近くの  
幹線道路建設の様子  
(筆者撮影 2019年8月)

## 2. ブンガマティ村コインチャ地区の人々：その文化的背景から

コインチャに古くから住むボシ (Boshi) と呼ばれる人々は、長い間多くの問題に直面してきた。ボシの人々は、リッチャビ (Lichchhavi) 朝<sup>6)</sup>の頃から先祖代々この地に暮らしており、カトマンドゥ盆地の雨乞いの祭りであるラト・マツチェンドラナート祭 (Rato Macchindranath Jatra)<sup>7)</sup>の山車を運営、管理することに献身的に協力してきている。いわば、彼らはカトマンドゥ盆地の伝統的な文化行事の担い手ということになる。ボシの人々は祭りのために木材を収集する必要から、毎年、45日間は森の中で過ごすことになる。そのため、人々は農業以外の他の職業に従事することができない。彼らの祭りのための献身的な労働の対価としてグティ (ネワールの社会組織)<sup>8)</sup>管理下にある土地の使用が認められてきた。しかし、ボシの人々は土地所有の証明書を持っていない。国家復興局は、ゴルカ大地震の被災者に助成金を支給しているが、彼らが家を再建することができなかった理由はこのためである。さらに、コインチャ地区の人々の主要な収入源である農業も幹線道路の建設により農地が没収されてしまい、確実に人々の生活に大きな影響を与えている。大震災後、農作業に従事するだけでは生活が厳しく、生活が以前にも増して困窮してきている。政府からは農業以外の目的で土地を使用しないように命令されていたが、生活苦のためにレンガ工場に土地を提供してしまったという住民もいた。

## Ⅲ. ラジオ放送番組「Bungamati Aawaj (ブンガマティ村の人々の声)」について

### 1. 「地域づくり」としてのラジオ放送番組の制作、実施に向けて

現地調査を重ねる中でさらに明らかになっていったことは、カトマンドゥ盆地に暮らす多く

の人々がラト・マツチェンドラナート祭については知っていても、その祭りの担い手がどのような人々であり、また、彼らが大地震以降、どのような状況に置かれているのか等、把握している人は実に少ないということであった。ブンガマティ村、特にコインチャ地区の人々は、何よりも自分たちがカトマンドゥ盆地の祭事の担い手であるという誇りがある。劣悪な生活環境に置かれていても自らのアイデンティティを誇示しつつ、他の土地に移ることなく住み続けているのだ。この村の内側と外側で生じている出来事の差異をどのように埋めていくことができるのかが地域の再生にも繋がっていくのではなかろうか。とりわけ、ブンガマティ村はインターネット環境に乏しく、住民の主な情報源は口承によるものやラジオ放送である。村落に暮らす成人の大半は、基礎教育の機会を逸してきたことも要因であり、とりわけ女性を中心に「情報弱者」であるともいえる。

社会の周辺に暮らす人々の抱える問題について、彼らの置かれている状況を広く周囲に知らせていくことが復興支援の一つとなるのではなかろうか。ラリトプルを拠点に活動するコミュニティラジオ放送局 Radio Sagarmatha、コインチャ地区にある小学校 Mahankar Primary School の支援を行っている現地 NGO, Nepal Foster Mate と共同でブンガマティ村に焦点を当てたラジオ放送番組を制作し、村の人々の声を地域社会に届けることとした。合わせて、放送を通じて住民が直面している問題の解決策を見出すことを目的とした<sup>9)</sup>。

## 2. 「Bungamati Aawaj (ブンガマティ村の人々の声)」の概要

筆者らは、「Bungamati Aawaj (ブンガマティ村の人々の声)」と称する放送番組を制作し、12話の長編ラジオ番組を放送実施した。ブンガマティ村のコインチャに暮らす人々が直面している問題の概要を説明し、解決策を見出すことを念頭に制作した。具体的には以下のとおりである。

- ・コミュニティラジオ放送において、成人女性のためのオルタナティブなノンフォーマル教育プログラムを提供すること。
- ・遠隔地に暮らす女性のための情報や学習活動へのアクセスの機会を提供すること。
- ・本プロジェクトを通じて、遠隔地の女性の知識や能力の可能性を探ること。
- ・農村地域の人々の意識を高めること。
- ・ブンガマティのコインチャに暮らすボシ・コミュニティが直面する問題を提起すること。
- ・大地震の被災者らの復興作業を支援すること。
- ・メディアを介し、関連する利害関係者と問題について話し合い、解決策を見出すこと。
- ・関連する利害関係者と住民との意見交換会を企画し、実施すること。
- ・地域を拠点とするコミュニティラジオ放送の活動の促進を図ること。

2019年8月からプロジェクトチームを編成し、9月、10月には予備調査を実施した。企画段階で特に重視した点は、ブンガマティ村に暮らす人々から強く問題を提起し、関連する政府関係者、地域行政官等の利害関係者の関心を引くためにも、メディアの力を効果的に活用することであ

った。何よりも、プログラムには問題を解決するために関連する利害関係者によるインタビュー記録も含めるように編集した。放送は2019年11月～2020年4月までの約6か月間とし、月に2回、第1木曜日と第3木曜日の午前8時に放送し、同日、午後7時30分に再放送を行った。12回の放送日程、インタビュー対象者は表1のとおりである<sup>10)</sup>。

表1 : Radio Program 「Bungamati Aawaj」 放送日程等

|                  |  |
|------------------|--|
| <b>Episode 1</b> | <b>Broadcast Date: 21<sup>st</sup> November, 2019</b><br><b>Interviews with: Locals, Former chairperson of Bungamati Ward</b>  |
| <b>Episode 2</b> | <b>Broadcast Date: 5<sup>th</sup> December, 2019</b><br><b>Interviews with: Locals</b>   |
| <b>Episode 3</b> | <b>Broadcast Date: 19<sup>th</sup> December, 2019</b><br><b>Interviews with: Ward Chairperson Ward Number 22 of Bungamati</b><br><b>Spokesperson of Guthi Corporation</b><br><b>Pearson of Department Head of Heritage</b>                           |
| <b>Episode 4</b> | <b>Broadcast Date: 2<sup>nd</sup> January, 2020</b><br><b>Interviews with: Locals, Ward Chairperson; Ward Number 22 of Bungamati</b><br><b>Senior Researcher, Nepal Health Research Council</b><br><b>Environmental Expert</b>                       |
| <b>Episode 5</b> | <b>Broadcast Date: 16<sup>th</sup> January, 2020</b><br><b>Interviews with: Locals, Former Ward Chairperson of Bungamati</b><br><b>Ward Chairperson</b>  |
| <b>Episode 6</b> | <b>Broadcast Date: 30<sup>th</sup> January, 2020</b><br><b>Interviews with: Ward Chairperson, Spokesperson for the Nepal Army,</b><br><b>Spokesperson for the Guthi Corporation,</b><br><b>Chief of the District Administrations Office-Lalitpur</b> |
| <b>Episode 7</b> | <b>Broadcast Date: 13<sup>th</sup> February, 2020</b><br><b>Interviews with: Chairperson of Bungamati Reconstruction Development</b><br><b>Council, Coordinator of Bungamati People's Committee,</b><br><b>Central Coordinator for Nepal</b>         |
| <b>Episode 8</b> | <b>Broadcast Date: 27<sup>th</sup> February, 2020</b><br><b>Interviews with: Locals, Principal of Mahankal Primary School,</b><br><b>Chairperson of Bungamati</b>  |

|                   |   |
|-------------------|---|
| <b>Episode 9</b>  | <b>Broadcast Date: 19<sup>th</sup> March, 2020</b><br><b>Interviews with: Provincial Member of Parliament for Bagmati Province</b><br><b>Member of State Assembly from Bagmati Province</b><br><b>- Ward Number 3 KA Lalitpur</b><br><b>Member of the House of Representatives, Pearson of Federal Parliament</b>                 |
| <b>Episode 10</b> | <b>Broadcast Date: 2<sup>nd</sup> April, 2020</b><br><b>Interviews with: Locals,</b><br><b>Former Ward Chairperson of Bungamati, District Permanent Head,</b><br><b>National Reconstruction Authority, Legal Officer from Guthi Corporation</b>   |
| <b>Episode 11</b> | <b>Broadcast Date: 16<sup>th</sup> April, 2020</b><br><b>Interviews with: Locals , People's Representative Ward Member,</b><br><b>Ward Chairperson of Ward 22, Bungamati, Member of State Assembly</b><br><b>from Bagmati Province - Ward Number 3 KA Lalitpur</b><br><b>Provincial Member of Parliament for Bagmati Province</b> |
| <b>Episode 12</b> | <b>Broadcast Date: 30<sup>th</sup> April, 2020</b><br><b>Interviews with: Locals</b>  |

注) Radio Sagarmatha, Nepal Foster Mate and NAGAOKA, Bungamati Aawaj ,2021 より筆者作成

### 3. 放送番組の概要

「Bungamati Aawaj」は、約6か月間(2019年11月～2020年4月)、12回に渡り放送した。各回の放送内容について簡単に概要を紹介する。

#### (1) Episode 1 : ボシと呼ばれる人々 (その1)

コインチャ地区の住民には、ラト・マツェンドラナート祭の山車の維持、管理に直接的な関係がある「ボシ」と呼ばれる人々がいる。ボシの人々は、毎年、45日間、カトマンドゥ盆地周辺の様々な森に行き、山車を作るのに必要な木材の収集に従事している。人々は大地震後、現在においても仮設住宅で暮らしている。もう一つの大きな問題は、先祖代々、譲り受けてきた土地が政府により幹線道路の建設に没収されてしまったことである。政府からは補償も受けておらず、家を再建することもできていない。ボシの人々は、政府や地元の代表者もこの問題を解決するために尽力してはいないことを嘆いている。

#### (2) Episode 2 : ボシと呼ばれる人々 (その2)

2015年のゴルカ大地震はコインチャ地区の40軒の家屋を完全に破壊した。そのため、人々は仮設住居に住むことを余儀なくされてきた。仮設住居での生活に関する問題としては、6～10人もの人々が小さなスペースに住んでいるために過密になっていることがあげられる。多くの高齢者は、仮設住居での暮らしから体調を崩し、亡くなった人もいる。地区の住民は、彼らの財政状

況と土地がグティ（地域の組合組織）に属しているため、家を再建することができない状態に置かれている。

### **(3) Episode 3 : ポシと呼ばれる人々（その3）**

コインチャ地区のポシの人々の主要なアイデンティティの1つは、彼らがラト・マツチェンドラナート祭の山車の維持、管理を担っていることである。ポシの人々は、この伝統的役割を世代から世代へと受け継いできたが、土地の所有権に関しては証拠が存在していないという。ポシの各世帯には、当時の政府からグティが所有する土地 12 ロパニ<sup>11)</sup>が人々の労働の対価として提供されたという。自治体には、土地の権利証を持っている人にものみ設計図を提供するという基準があるため、多くの世帯は政府側からの財政援助を受ける機会を奪われている。

### **(4) Episode 4 : 復興という名の開発事業 : 大気汚染, 環境破壊**

地域でレンガ窯が稼働しているために人々が直面している健康やその他の問題に焦点を当てている。カトマンドゥ渓谷周辺では、100 近くのレンガ窯があるが、20 年ほど前から、レンガ窯は住宅地以外に設置されるようになった。しかし、ブンガマティ村のようなケースからすれば、これは、もはや当てはまらない。ブンガマティ周辺地域では、合計 8 つのレンガ窯が運営されているからである。レンガ窯の操業は、大気汚染をはじめ多くの問題を引き起こしている。地方自治体が独自のルールを作り、運営方法を考えることが重要である。

### **(5) Episode 5 : 復興という名の開発事業 : 幹線道路の建設をめぐって（その1）**

カトマンドゥとタライをつなぐ幹線道路の建設は、ネパール政府の優先的事業の1つである。道路はカトマンドゥ盆地とタライの間の社会的、文化的、経済的関係を強化することを目的としている。道路の出発点は、コカナ（Kokana）とブンガマティという世界遺産の地からである。そのため、人々は政府による事業がこの地域に暮らす人々を追い出してしまうことに立腹している。プロジェクトは間違いなく人々の生活に影響を与えている。

### **(6) Episode 6 : 復興という名の開発事業 : 幹線道路の建設をめぐって（その2）**

幹線道路は確実にカトマンドゥ盆地とタライ地域を近づけるであろう。しかし、道路が広大な農地を奪ったため、米やその他の食料品を他の国に依存するようになる可能性がある。これに伴い、世界遺産に認定された地域の美しさが損なわれる可能性がある。国の事業から生じる問題に対処するために、周辺地域の人々、地方自治体、及びその他の利害関係者は定期的に話し合いを行うことが重要である。政府が農業で生計を営む人々の主要な収入源である農地を没収したため、彼らに代替の仕事を提供することは国の責任である。

### **(7) Episode 7 : 復興という名の開発事業 : 幹線道路の建設をめぐって（その3）**

人々はブンガマティとコカナの集落の保護を要求するために最高裁判所に法的支援を求めている。政府がブンガマティとコカナ地域で幹線道路、スマートシティ、リングロード外周、高圧線、バグマティ回廊などの 9 つの異なるプロジェクトを実施することを計画しているからである。政府は世界遺産と文化を優先に観光事業を推進してきたにもかかわらず、その歴史、文化、遺産、

古代の集落を考慮せずにこの地でプロジェクトを計画しているのである。地元の人々の権利,文化的,社会的,職業的,経済的側面に与える影響についても考える必要がある。

#### **(8) Episode 8 : 復興という名の開発事業 : 幹線道路の建設をめぐる (その4)**

最高裁判所によるブンガマティとコカナの古代集落の保護を要求する人々を特集する。関連する利害関係者もこの問題についてブンガマティの人々を支援している。私有地を所有するブンガマティから 52 名とグティの土地に住む 13 名が共同で最高裁判所に書面を提出した。多くの組織は,政府が事業を実施することにより,古代からの集落を破壊しようとしていると非難している。彼らは政府が復興という名の開発事業の下で破壊をもたらしているだけだと感じている。プロジェクトによって引き起こされた社会的,文化的,経済的影響について一定期間内に検討されない場合,それはカトマンドゥ盆地に住む人々にとって大きな問題になるだけでなく,政策立案者にとっても問題となることを伝えている。

#### **(9) Episode 9 : ブンガマティの人々の声を受けて**

第 9 回の放送ではコインチャの住民が直面している問題を解決するために国会議員が行った実践を特集する。人々は,政府によって導入されたプロジェクトが古代の集落を台無しにすることを恐れ,コカナとブンガマティの古代の集落を保護するための法的支援を求めている。また,大地震以降,人々は祖先の土地に家を建て直すことができずにいる。人々の権利は,法律が修正されるまで,そして修正されない限り保障されることはない。そのため,グティの土地に住む人々の権利を守るために,グティ法案も修正されなければならないことを伝えている。

#### **(10) Episode 10 : 意見交換会 (その1)**

関連する利害関係者との意見交換会が 2020 年 3 月 14 日に開催され,コインチャの住民が直面している困難な問題の概要を説明してもらった。最後に,Radio Sagarmatha からも,地元の人々が少なくとも当面は家を再建できるように国家再建局に要請を求めた。これまで,政府は特定の仕事のために土地を得た人々は,その土地に対する権利を得るであろうと声明を出していた。しかし今や,政府は地区の人々が長い間農業に従事してきたにもかかわらず,土地に対する権利をはく奪しようとしている。

#### **(11) Episode 11 : 意見交換会 (その2)**

前回の放送は,2015 年のゴルカ大地震で倒壊した家屋の再建を人々に制限した主な理由について,意見交換会にて利害関係者に説明を求めたものである。グティ,国家復興委員会,および地区の代表者全員が,人々が家を再建することに障害はないことを非常に明確に述べた。しかし,コインチャの人々は土地の権利証が発行されていないため,問題は解決されていないという。そのため,土地の権利証を正しく取得できるように,グティ法案を修正する必要があることを伝えた。

#### **(12) Episode 12 : 最終回**

2015 年の大地震以降,ブンガマティ,コインチャの住民は家を再建することができない状況に

ある。国家復興局は, Poush 2077 年<sup>12)</sup>までにすべての復興作業を完了することを目標としている。しかし, グティの土地に建てられた 200 世帯は今でも仮設住宅に住んでいる。この地区に暮らす高齢者はこの放送でも強調されているように, 子どもや孫が家を建て直す姿を見ることを望んでいる。



写真3 意見交換会にて発言する村の女性  
(Kaji Ratna Shakya 氏撮影)



写真4 ブンガマティ・アワジ 第12回  
<https://www.youtube.com/watch?v=yx2IMzvbHNs>

## IV. 放送を終えて

### 1. 放送後の変化

約6か月間のラジオ放送は, 地域社会にどのような影響を及ぼしたのであろうか。第一に, ブンガマティ村周辺がレンガ工場の排煙によって引き起こされている深刻な大気汚染について広く周辺地域に伝えることに重要な役割を果たしたといえる。第二に, ブンガマティ村の地区委員長は意見交換会において, 家屋の再建は設計図を用意した後にのみ着工するように求めている。しかし, ラジオ放送の他に意見交換会の様子をニュース動画に編集し, ネット上で配信したことにより, コインチャ地区の 75%の世帯が家屋の再建に向けて着工し始めることにつながったことがその後の調査で明らかになった。地域行政局が着工を許可することを認めたのである。第三に, グティ委員会, 国家復興局, 及び, 政府の様々なレベルの国会議員の代表者は, 地元の人々が先祖代々から受け継いできた土地を没収しないこと, また地元の人々の復興プロセスを支援することを約束するに至った。

Radio Sagarmatha はグティの担当者にもインタビューを行い, ブンガマティの人々が直面している問題を解決するために彼らがどのような努力をしているのかを伝えた。大地震発生から約5年を経て, ようやく家屋の再建に向けて動き出すことができたことに, コインチャ地区の人々は喜んでいる。しかし, 生活が困窮している現在, 再建のための資金が不足している。政府からの助成金ではとても足りず, 平屋建て2部屋の小さな家を建てることしかできないという。

また, 2020年3月以降, カトマンドゥ盆地は COVID-19 の急激な感染拡大により経済封鎖となったため, 建築資材を調達することも困難な状況にあることが伝えられている。ようやく村人

たちが生活環境を整えようと動き出した矢先のことであったが、コミュニティラジオ放送の力で地域の再生へ一歩を踏み出したことに違いない。

## V. 考察

### 1. 地域づくりを育むメディアの役割と社会教育的価値

本稿は、ゴルカ大地震の後、ブンガマティ村コインチャ地区に暮らすボシと呼ばれる人々が置かれた状況について、彼らの権利保障をめぐる闘いや地域の中で育まれている人々の関係性についてのインタビュー記録を編集し、ラジオ放送番組として配信したことを社会教育の観点から分析するものである。それは、人々が大地震からの復興を目指す過程において、どのように自身の問題に対処していくことができるのか、地域社会への参画の在り方や、地域の再生について検討するものでもある。本稿で事例として紹介したボシの人々は、カトマンドゥ盆地の風物詩ともいわれるラト・マツェンドラナート祭の担い手であり、地域の伝統文化のアクターでもあるといえる。自らの生活圏が大地震により破壊されたにもかかわらず、復興支援という名の下で展開される国家の開発事業に巻き込まれることになり、健康被害や農地を没収され、生活圏を侵害されるという二重、三重の不利益を被っているのである。このような状況に置かれている人々について、コミュニティラジオ放送が現状を伝えることに大きく貢献したことは事実である。「声なき者の声」を拾い上げ、周辺地域に届けたことが、ブンガマティの人々の生活環境を変えることにつながったのである。

ラジオ放送の社会的意義について言及すれば、ラジオ放送は、時に政治的なイデオロギー装置にも捉えられかねないということである。ネパールにおいてコミュニティラジオ放送のニーズが高い理由には、この国の多様な社会、文化的要因が背景にある。ネパールのラジオ放送は1951年以降、国家の近代化政策としてもRadio Nepalを中心に展開した。それは、広くネパール全土に中央政府から情報を伝えることに特化されるものであった。とりわけ、1961年から1990年までの30年間に渡るパンチャーヤット体制下では、国民の自由な表現活動が厳しく禁じられていたため、民主主義体制に移行後に地域を拠点にしたコミュニティラジオ放送の活動が急速に展開していったことは、まさに、「地域づくり」のために人々がそれぞれの観点からメッセージを発信し、社会に参画しようとする動きそのものであるといえる。慢性的な社会の貧困、多様な民族、多言語状況、起伏の激しいネパールの地理的環境等を考慮すれば、コミュニティラジオ放送は、経済的問題も克服し、また、時間的、空間的にも利点がある。また、豊かな地域性やあらゆる層の人々にも等しくアクセスすることができるメディアとして有意性があると考えられる。

本稿で紹介したブンガマティ村コインチャ地区の人々の取材記録は、ローカルメディアによる限られた範囲の情報ではあるものの、社会の周辺からの強いメッセージとして位置づけられ

よう。それは、地域社会に暮らす人々がいかに自身の生活課題を克服することが可能であるのか、また、自らが社会に参画していくにはどのような術が必要となるのか、共に語り合い、知見を共有する作業に他ならず、換言すれば、成人期の学習課題に他ならない。生涯学習の観点からもメディアを活用した地域づくりは意義深く、多様な可能性を秘めている。さらに、「地域づくり」をいかに捉え、また、地域再生に向けたメディアの役割を検討していくことが、社会教育的価値を深めていく上でも不可欠である。残された課題として検討を重ねたい。

### 〈注〉

- 1) 外務省国際協力局 地球規模課題総括課,持続可能な開発目標 (SDGs) 達成に向けて日本が果たす役割,[https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/sdgs\\_gaiyou\\_202009.pdf](https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/sdgs_gaiyou_202009.pdf)
- 2) 例えば、笈祐介 (2019)『持続可能な地域の作り方：未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン』では、具体的な取り組みについて分かりやすく図式化し、解説がなされている。
- 3) 日本社会教育学会編、『地域づくりと社会教育的価値の創造』,日本の社会教育第 63 集,東洋館出版社,2019
- 4) 長岡智寿子,「ラジオ放送を活用した農村女性のためのリテラシープログラムの展開」『ネパール女性の社会参加と識字教育：生活世界に基づいた学びの実践』,明石書店,2018,pp182-194.
- 5) NAGAOKA, Chizuko ed, Our memory and experience :Gorkha Earthquake on 25th April 2015, SEFU, 2017  
長岡智寿子,「共に学び合う「防災教育」の必要性：ネパール大地震からの復興に向けて」『国立教育政策研究所紀要』,第 145 集, 2016
- 6) リッチャヴィ朝は古代ネパールの存在が確実な最古の王朝である。インド・アーリア系民族の出身とされ、4 世紀から 9 世紀まで存続した。
- 7) マッチェンドラナート祭は、雨乞いの祭りともいわれ、田植えを控えた頃、マッチェンドラナート神を山車に乗せて市内を巡行する。ラト (赤)・マッチェンドラナートはパタン市内を巡行する。
- 8) グティは集会を意味し、ネパールの宗教・文化活動、公益、慈善事業等を行う基礎的社会単位である。組織によっては貯蓄、頼母子講的活動、金融・投資活動を行うものもある。日本ネパール協会編『現代ネパールを知るための 60 章』, 明石書店,2020,pp.306-310.
- 9)カトマンドゥ盆地を活動の拠点とするコミュニティラジオ放送局 Radio Sagarmatha や教育支援活動に取り組む現地 NGO の Nepal Foster Mate とは、かつてブンガマティ村で識字教育のプロジェクトに共同で取り組んだ経緯がある。詳しくは下記参照のこと。  
Nagaoka & Karki, Using Community Radio in a Rural Women's Post-literacy Programme in Nepal, Journal of Learning for Development- JL4D, Vol.1, No.2, 2014
- 10) Radio Sagarmatha, Nepal Foster Mate and NAGAOKA, Bungamati Aawaj ,2021
- 11) ロパニとは、ネパールの面積の単位。1 ロパニ=約 0.05ha
- 12) ネパールにはビクラム暦という国独自の年月が存在する。西暦とは異なり、毎年 4 月にネパール新年が始まる。2077 年は西暦 2020 年 4 月中旬~2021 年 4 月中旬までを意味する。

### 〈参考文献〉

- 石井 博, 聖地カトマンドゥ：諸宗教・観念の複合と変化, ヒマラヤ学誌 No.18, 147-157, 2017
- 長岡智寿子,「リテラシー活動の展開：ネパールにおけるコミュニティラジオ放送との共同研究を踏まえて」, 基礎教育保障学会第 5 回研究大会シンポジウム「コロナ禍時代に基礎教育保障からメディア情報リテラシーを考える」, 発表資料,2020,9,6
- 岡原 都, 戦後日本のメディアと社会教育,福村出版,2009

OCHR、Unesco Kathmandu, I am Nepali Hear My Voice, 2007

Onta, Mass Media in Post 1990 Nepal, Martine Chautari, 2006

鈴木淳 新技術の社会誌, 日本の近代 15, 中央公論新社, 1999

追記) 本研究は以下の研究活動の成果の一部である。 基盤研究 (C) 18K11790, 「大災害後の社会におけるネパール女性のノンフォーマル教育活動の質的探求」, 研究代表: 長岡智寿子, および, 基盤研究 (C) 18K00888, 「ビデオレターを活用した異文化理解・交流のための外国語教育の実践研究」, 研究代表: 坂本旬